

# 山下先生との出会いと

## 思い出

土橋光子

### 山下先生と功刀先生と私

昭和二十一年焼土の中で新教育は幼稚園からと、いち早く幼ない人たちに心を向けられていた様である。終戦直後その年の三月二七日私の面接がおこなわれる経過を少しのべさせていたよくことにする。戦後の東京は活気に湧いてはいたが、惨たんたるものであった。頭上から生命をおびやかすものはなかったが目標を無くした人々はこれからの生活を何かして生きようと、何の決めてもないのに東京へ東京へと集まり、右往左往しはじめていた時である。

扱、私が保育の勉強を受けたのは第二次大戦のはじま

る二、三年前、東洋英和短期大学がまだ、幼稚園師範科と言った時代である。当時一学年一学級二十名たらずの級友と共に保育の「ほ」から教えて下さった師の一人である功刀嘉子と山下先生をはなして考えることは出来ない。功刀先生も子ども達をと思いをよせられた第一の人の一人であったと思う。二十年七月七日に私が家も勤務先の山梨英和幼稚園も戦火にあい、焼土の後始末を一応すませ、帰還してくる兄弟たちを待ちながら、焼失した幼稚園の報告をかねて翌二十一年三月に母校を守り続けておられた功刀先生をお訪ねしたのである。姉妹校二校も被害を受けているので山梨の方は一番後になる故しばらく母校を助ける様にと推薦をいただいたのであるが、とてもその任に適さないと固く辞して帰省して来た。その二日後に通の電報を手にしたのである。

「シゴトアリ、スグ ジョウキョウマツ」クヌギ

このクヌギの三文字の魔力にかかった様に又翌朝一番列車の人となって先生におめにかかり、指定の場所に向いていったのである。

## 同業者として迎えられる

そこは文化学園（中野にある）の一室、将来保育室になった部屋であったが、来意を告げると、長身、長髪の立派な山下先生が、自から出迎えて下さり、ご自身で私に椅子をととのえ、御自身も席につかれながら「さあ、かけて下さい！」と……何もない殺風景の部屋に何という温かさを感じた事だろう。この時の印象を有りのままに述べさせていたとくと、第一にお声が気になった。第二にその立居振舞の正しさに驚き、第三に身だしなみのよさを感じたのである。功刀先生からは「なにしろお目にかかり自分の目で見、心で感じていらっしやい。そして自分で決めてくるのよ」といわれていた。私は席につくまえに定石通りの挨拶をすませ来意を繰り返すと、終始ニコニコと聞いていて下さったのであるが「そう、功刀さんから、あなたの事は聞いています。ところで四月からここを手伝ってくれますね！」とずばりと本題に入ってこられた。私に対して何の質問もなく、私の答で決定するべく待って下さっているのである。私には静かでないが時間のように思われたが、その沈黙の時は瞬時

であり、やっと眼をあげた私に、「あなたが引き受けてくれると、全員揃うのだが……」黙って待ち、考える時を与えると言う仕方はその後共に働く様になってからもずっと変化しなかった事である。「よろしくお願い致します。」……これで決定したのである。

この短かい沈黙の中を小舟が急流を下るように、私の周囲は変化していった。私に決心をさせた大きな理由は信頼感であったと思う。

私の師であり先生とは当時仕事上で沢山の交流があったにせよ、自分の前にいる初めての者に何の問い正しもせず、自分で答を出すのを静かに待っていて下さった先生の心に引き込まれたのである。「第一印象って大切よ」などと当時、生意気な事を言っていた時期もあったが、私は鈍で人をひとめ見てこんな人などと見ぬく事はむづかしく、強いて言えばいくらか意気（心）に感ずる事は出来たようである。御自身が始めようとしている大切な仕事の一つを、見ず知らずの私のような人間にまかせ共に仕事をしようとして下さったその意気にある。後は事務処理、学園長教職員との引き合せ、仕事分担、園舎の見聞、必要なもの書き出し等、新たに開園しようと

する園につきものの諸雑事である。何にしろ大人用に建てられているところを使つての産声である。様々の事があつたが、そこは無我夢中、師に報告して一度帰省、あらためて永住するべく上京のしなおしである。二十七日の夜汽車の中で、何と、な——がくつて短かい日だったかと思ひながらゴトゴトと揺れていた。

三十日上京、三十一日から出勤、この様に当時の状況を書いてみると紙面がなくなる。

### 子どもへの愛情と先生の横顔

沢山の仕事をお持ちになりながら呱呱の声をあげた文  
化幼稚園での子どもと私達と三十代の頃の先生の姿を有  
りのままにお話することとしましょう。

昭和二十一年五月 開園式、園児数五十名、いづれ新  
園舎が与えられるであろう敷地内につだけ先生ご自慢  
のものがあつた。それは三間×三間の大きな砂場と、か  
ぼちやの蔓が這いまわる広い園庭であつた。水道はあつ  
たのだが、庭にギッコンギッコンとこぐポンプ式の井戸  
があつた。晴れた日には砂場にコッポリとしゃがみこ  
み、井戸から水を運んで、砂と水にまみれて遊び興じて

いた毎日であり、今も昔もかわらない「おだんど」作り  
に熱中していた。園長先生の出勤日は週、二、三日だつ  
たと思う。出勤なさると上衣をぬがれて遊び興じている  
砂場に必ず出ていらっしやる。砂場のふちに腰かけるの  
ではなく、しゃがむ格好で遊びを見ておられた。その日  
も三歳児がやつと丸められた砂のだんどを真黒い手にの  
せて大事そうに持参し、「園長先生にあげる」と見上げ  
ている……扱、この光景を見ていた眼が他にもいくつか  
あつた。先生は「む！おいしそうだね！」顔はニコニコ  
しながらも何となく困惑していらっしやる様であつた  
が、おもむろに三本指でつまもうとしていたのである。  
「あっ！こわれる！」と心配顔、先生は上手につまみ  
上げると左手の平をさゝえにして「うん！なかなかお  
いしいね！」と口もとに、……清潔第一の先生が砂のだ  
んどをつまんで喰べた。教師会の話題になり、「あの時、  
どうなさるかとすごく興味があつたんです」と言つて  
いる。白いYシャツにネクタイ、折目正しいズボン、ピ  
カピカに黒光りのする靴、遊びが終つて子どもたちが真  
剣にこぐポンプの水で丹念に掌、指の間、外側、内側を丁  
寧に洗い終つて「おさきにありがとう」と真白々のハン

カチで拭いていた姿<sup>II</sup>と黒い砂のだんごをおいしそうに喰べていた姿が重なり合う。そこには見えない糸を見た保育者達と、心のつながりを感じとっていた子ども達、さし出す手と受ける手、その間を往復する温い心のふれあいは今も尚私の心の中に残る流れである。寄宿舎改築の新園舎が出現した時は大変だった。16本の角材の柱が林立する保育室である。こまட்டたのは教師であつて、園長は子どもたちとその間を縫つておいかけつこである。先生の肩車で天井に手がとどくと大はしゃぎする。床の上をころげまわつての大相撲、手造りの馬と一枚板のシーン<sup>I</sup>、相撲の後などクシヤクシヤになつた髪をかき上げながら「やられた、やられた」と職員室に入つてこられる。遠足はよく多摩川堤を歩いたものであるが、当時、武蔵境の農家で牛を飼つていた。そのお宅の庭先に新聞紙を敷き持ちよつたお弁当をわけあつて喰べ、雌牛の大きな乳房を子どもとのぞきこみながら、牛乳の話をきいたものである。山羊先生（山下先生のニックネーム）が牛乳の話をあの声で熱心に話して下さる姿はご想像にまかせましよう。

学者としての先生の裏側には、二人のお子様や奥様、

私達を含めての素晴らしい父親の姿を拝見していたのである。共にコーラスやトランプに興じた時もあり、また、生物ぬぎの「お寿し」も思い出の一つである。あまりご健康でなかつたことと、戦後の時代的背景もあり、食物や清潔の習慣も人一倍きびしかつたようである。

先生の思い出を書くことを光榮とし感謝の念で一杯ですが、最後にもう一つだけ書き残させていたゞきたい言葉をお伝えしてペンをおきたいと思ひます。母の会総会で教諭の紹介をいたゞいた時である。「この若い人たちは母親の経験はない者だが、少し保育の勉強をした人たちですどうぞ信頼して御子様を托して下さい、しかし人間である故に悲しい問題も多々おこるかもしれません。心の行き違いもあると思ひます。その責任はすべて園長である私がおひますので話し合ひに来て下さい。この人々たちを責めないでほしいのです。」この時の言葉は今も尚私の中に生き続けている。職場の長たる人の眞の姿であり、若い時にこの様な先生に出合えた事を感謝している。この園長のもとで全力投球しながら温かい血の通つた保育者に育ちたいと願いつつ今も一歩々々進んでいる毎日である。

（横浜学園附元町幼稚園）